劇中におけるミカエラの役割

16 年入学　電気電子情報通信工学科　齋藤 那菜

1. 目的

　ミカエラは登場回数が少ないが、大切な役割を果たしている。その役割をまとめるとともに、もしミカエラがいなかった場合、劇にどのような影響があるのか考察する。

2. 1 幕でのミカエラ

　1 幕に登場するミカエラは、カルメンがホセに惚れる理由の 1 つとして登場する。また、ホセの性格を知らせる役割も（し）担っている。

　カルメンはその美貌から、常に周囲の男性から言い寄られていた。そのため、普通の男性ではカルメンを振り向かせることはできない。ここでカルメンがホセに興味を持った理由としては、カルメンに興味がなさそうな態度が挙げられる。ホセがカルメンに簡単に惹かれなかったのは、ミカエラが身近にいて、ミカエラに好意を寄せていたからだと考えられる。冒頭でミカエラが他の兵隊に言い寄られていたことから、ミカエラが美人であることがわかり、さらに小さいころから同じ家で仲良く暮らしてきたのであれば、ホセが彼女に好意を寄せていると考えてよいだろう。また、3 幕のミカエラのアリアで、「かつて私の愛した人」とホセのことを歌っているので、ミカエラもまたホセに好意があ（る）ったと考えられる。この好意がたとえ恋でなかったとしても、ミカエラの好意をホセが感じとっていて、明確な恋人関係がなくても、ホセにとっては似たような関係だったのかもしれない。

　しかし、恋人や好きな人がいながら他の女性に声をかける男性もいる。ホセはカルメンから声をかけられるまであまり気にしていない様子だったので、一途で真面目な人間だと考えられる。

　ホセは真面目ではあるが、カルメンからのアプローチで惑わされ、罪を犯したカルメンを逃がしてしまうほどその日のうちに惚れこんでしまう一面をも持つ。もしここでミカエラがいなかった場合、カルメンが登場したシーンで（他の男たちと同様に）~~既に~~カルメンに興味を持っただろう。さらにホセは、2 幕で上官スニーガに対して逆上し攻撃するほど、理性を保てない人間である。従って、カルメンを一目見て惚れた場合にはその場で何かしらのアプローチをしていただろうし、たとえ声をかけなかったとしても、カルメ

ンから接触があった段階で陥落していただろう。この状態でカルメンとホセに関係が生まれるとすると、カルメンの自由や孤高といったイメージが薄まってしまうと考える。（また femme fatale（運命の女）というカルメンの属性が発揮されないことになる。）

3. 3 幕でのミカエラ

3 幕では、ホセとカルメンを一旦引きはなす役割となり、ホセの性格をより強く観客に知らせることにつながる。

ここでホセとカルメンを引き離すことで、4 幕でエスカミーリョとカルメンの関係がスムーズに受け入れられる。もしホセがカルメンの傍にいたら、エスカミーリョとの関係を邪魔していたと考えられる。この状況であれば、4 幕でカルメンとエスカミーリョはうまくいかなかったと考えられる。ホセは、カルメンとエスカミーリョが仲良くしようとしているときに黙っているような人間ではない。

また、4 幕でホセは再びカルメンに言い寄る。3 幕末尾で故郷に帰ってカルメンと少しでも会わなくなったのだから、ホセのために山奥まで来たミカエラとよりを戻す良い機会だと思える。しかしホセは、離れた故郷でもカルメンに対する執着を捨てなかったため、彼はよほどプライドが高く、愚直であることがわかる。

4. まとめ

1 幕と 3 幕に少ししか登場しないミカエラであるが、結末の暗示や雰囲気づくり以外にも、物語を自然に進ませる役割を担っている。ホセの家に引き取られたみなしごという設定も、他人ではなく家族の一員ということで、ホセのことを簡単に見捨てない理由になり、観客はミカエラの行動が受け入れやすい。様々な工夫（をもって）が功を奏して、歌劇カルメンは名作と呼ばれている。

参考文献

“Carmen ActIII”, “オペラ対訳プロジェクト”,
https://www31.atwiki.jp/oper/pages/2785.html